

茶話

SAWA

日本茶インストラクター
協会熊本県支部会報

平成20年11月25日発行

第22号

お茶まつり大特集 Part II

『全国お茶まつり熊本大会』 各ブースからの感動報告

お茶カフェ編

日本茶プレミアム(お茶カフェ)

山崎真一

全国お茶まつりのイベント、皆様大変ご苦勞様でした。担当毎に一年間幾度となく会合を重ね、構想を練り準備を進めてきた成果が大成功に繋がったのだと思います。想像を超える来場者に圧倒され、また感動した一日になりました。



さて、『日本茶プレミアム』

では、県内産の全国品評会上位入賞茶を呈茶しました。採算を度外視して、ただ品質のみを追求した稀少で極上のお茶を喫茶(食)された方達は、私たちが予想した通り(?)の嬉しい反応を示されました。中には「今度相良のお茶を買ってみます」とか「錦のお茶は何処で売っているのですか?」と言った言葉もかけて頂きました。「熊本県でもすばらしいお茶が出来る」ことをPRするには絶好の機会だったと思います。ただ、長時間待つて頂いたり、席に着くことさえ出来なかつたお客様には、大変申し訳なく思いました。今回は、沢山の人がお茶に関心を持ってきてくれているということを実感でき、お茶に携わっていく上で大変勇気付けられるものでした。これからも私たちがインストラクターはじめ茶業界が一丸となって日本茶の素晴らしさをPRし、消費拡大につなげて行きましょう。

香りの銘茶紀行(お茶カフェ)

大塚美佐子



『銘茶紀行』何をどの様に提供するか?問題山積でした。何回も議論を重ねた末、やはり香りの品種茶を差し上げたい、お茶にも香りの世界がある事をお知らせしたいと云う事になりました。早速、特徴的な香りのお茶を取り寄せて頂き、試飲を重ね、四種のお茶に決めました。時間や道具等を考え、三種のお茶を水屋で用意し、一種を席中で、説明しながら淹れる事にしました。全く違う其々の淹れ方も苦勞した点です。

四種のお茶を、「花鳥風月」と名付けました。自然の美しい風情を楽しむ様に、お茶を楽しんで頂こうという趣向です。お菓子は、熊本城に浮かぶ月に擬え、「栗名月」と名付けた物を特注し、席中の布巾を紅葉柄にする等、季節にこだわりました。

各々が出来る事を分担し、飛び回り、話し合い、一つ一つ形にしていけます。用意万端、いよいよ本番です。雨の中、沢山のお客様に来て頂き、一時間が

過ぎた頃には、これならやれると確信しました。しかし、半々で休憩を取りながらと思っていきましたが、結局殆ど休みが取れず立ちっぱなしの状態でした。読みの甘さと、段取りの悪さに反省しきりです。

お茶を飲んで頂いたお客様の多くは、香りの特徴を分かって頂く迄いかず、香りが違う事は分かるとの事でした。「美味しいお茶!」「お菓子買えないの?」と嬉しい言葉も頂きました。又、本番では全会員お客様のお相手をして、よい経験が出来たと思います。

お茶まつりは、何も無い処から一つの形を作る難しさを知ると共に、会員の方の新たな一面意外な人脈等驚く事も多く、より信頼を深めるものでした。多くの方のご協力に心から、感謝いたしております。

日本番茶紀行(お茶カフェ)

江越祥子

2月の総会から10月5日の「お茶まつり」まで、ほぼ毎日皆さん本場にお疲れ様でした。

この協会に入ってから「お茶まつり」は初めての事。全くイメージも湧かず、ただ毎回の打ち合わせ会議に参加するのみでした。会議を重ねる度にお互いの力を出し合い、一人一人の気持ち一つにまとまったことは何より成功だったと思います。

9月の八代では、まず100名を前提として対応することとし

ました。晩茶は前日から5種類を煮出し、冷ましたものを呈茶すること。そのための茶葉の準備、容器のこなど細かく検討する作業でした。午前中のひどい雨から一転、午後の本番は天気も持ちなおし、お客様への対応はなれない説明に不安を抱きながらも何とか終えました。

このことをふまえて更に打ち合わせを重ねました。いよいよ10月4日(前日)は晩茶の煮出しと道具を再確認し、準備に集まった皆さんは全員汗だくでした。

当日は応援の皆さんと合流、カフェの客席と呈茶の方法についてお互いの気持ちを整えました。実際に飲んでいただいたお客様は「日ごろ口にしたお茶」ということで楽しんでもらったようです。



最後に肥後晩茶作り(8月)から関わってくださった生産地はじめ皆さんのご支援に心より感謝しています。今回得た貴重な体験を、これから活かせるよう精進したいと思います。

『全国お茶まつり熊本大会』

各ブースからの感動報告

続お茶カフェ編

加納洋子

お茶カフェ受付は総勢13名(会員7名・応援6名)で担当し、述べ756名のお客様をお迎えいたしました。疲労感に残りましたが、貴重な経験をさせて頂いたと喜んでいきます。

8月末、銘茶晩茶の仲間とあれこれ検討しているうちに受付に話がおよび、執行部に受付についてお尋ねしましたところ「皆さん交代で」との事でした。受付は専属にしたほうが確実な業務が出来ると思具申し、受付担当を希望致しました。



9月14日茶入礼場で実施された会議では受付がイメージでき、21日の秋の茶まつりin八代では、お客様をお迎えしての

実動であったため、問題点が浮き彫りになり大いに参考になりました。この時を持って受付要領の概成を得た次第です。

10月5日午前10時オープンと同時に一気に押し寄せるお客様の波、お客様の希望茶を聞きつつ受付へと上手く誘導した福本さんと猪原さん、料金受領と時間調整を確実にした山田さんと内さん、紅茶・お茶マップなどを終始笑顔で配った野田さん、あの錯綜の中お客様を各テーブルまでスムーズにご案内した城さん。受け付け業務が無事に終了出来ましたのは、各人の誠実な対応、臨機応変の処置のおかげでした。

「皆さんそして応援さんに感謝。『お茶まつり』を裏から支えた人達

このお茶まつりには会員以外に多くのスタッフの協力がありました。鹿児島県より応援に駆けつけていただいた窪田様より感想を戴きました。

鹿児島県支部 窪田雅子

熊本県支部の皆様、「全国お茶まつり」の企画準備から開催まで、本当にお疲れ様でした。

会場が一番奥のゾーンだったにもかかわらず大盛況で、多くの方々に日本茶の世界を楽しんで戴けたのではないかと思います。

鹿児島中央駅を始発の新幹線に飛び乗り、グランメッセまでバスを乗り継いでお手伝いに参加させていただきましたが、女

性部の方々ははじめ皆様に暖かく迎え入れていただき、本当に楽しく、ワクワクドキドキしながら、良きお茶体験をさせて頂きました。心からお礼申し上げます。

朝10時の開場から入場者はひっきりなしで、日本茶プレミアム、香りの銘茶紀行、日本晩茶紀行と、どのテーブルもお客様は皆、ゆっくりお茶を味わいつつ、講師の話に聞き入り、いくつのお茶への質問をしながら、知られざる茶の知識を深めてゆかれたようです。

各テーブルにさりげなく飾られた秋の花や、会場の所々に置かれた茶の鉢植えなどお茶のある空間を引き立ててくれるアイテムになっていったと思います。

3つのカフェは同じ水屋で準備され、私もスタッフとして呈茶するタイミングの難しさを実感しました。しかし、大忙しの仲でも皆様のチームワークと手際の良さにとても感心しましたし、日ごろからの相互の信頼関係の証かと思えます。

私達鹿児島支部でも女性部「茶愉の会」を作り、いろいろな研修会や活動を行っております。今後ともぜひ、イベントや多くの機会を通じて、了見の交流を深めさせていただければうれしいと思っております。

『釜炒り茶フォーラム』

(茶話22号パートIより続き)

フォーラムについて4月の県支部の会議で了解が得られると釜炒り茶に関心を寄せられている根角氏に相談してコーディネーターを依頼するとともに、パネラーの選定からフォーラムの運営体制、参加者募集や周知方法、お茶まつり実行委員会との調整など、具体的な内容について助言をいただきました。

また、パネラーについても釜炒り茶に問題意識を持たれており、フォーラムの事を相談させてもらうと快諾をいただき順調に準備を進めたところでした。

一番心配したのはフォーラムと全国支部長会議の時間とが重なったこと、パネラーを依頼していた高宇氏や山梨氏は協会の理事を務められており、パネルディスカッションはどうなるものかと危惧したのですが、協会の「理解と協力の下に当初の計画通りに実施することが出来ました。

嬉しかったのはお茶カフェ受付メンバーの方々が、当日のスタッフとして協力して戴いた事です。大会式典が行われている午前中に会場設置を行って、午後からフォーラムという日程でしたが、午後からは翌日のお茶カフェ等の準備も予定されておりましたのでどのようにスタッフのやり繰りをするのか当惑していたところ、快く役割を引き受け

てくださった県支部会員には感謝するところです。(紙面を借りてお礼申し上げます。)

このような状況からコーディネーターやパネラーとの最終打ち合わせが行えない中でスタートした『釜炒り茶フォーラム』でしたが、20名近い方にお集まりいただき盛況に催すことができました。参加者からは「東京や北海道でも釜炒り茶フォーラムを開催して」という温かい言葉もいただき、情報発信の必要性を確信したところです。

決して多くはないかもしれないけれど、釜炒り茶に関心を持たれている方が必ず居られるということが分かり、消費地においても何らかの方法で釜炒り茶の理解促進に取り組んでいきたいと思ったところでした。

(了)

